

## 思い出すことども ～そして今～

第5期（1957年卒業） 深田 恒夫

私たち5期生は1957年（昭和32年）卒業です。  
茫々60年 薄れかけた記憶の糸を手繰りながら 中屋先生にかかわるわたくしの  
とても個人的な思い出、そして老境の今を報告して、諸兄姉の卓越した論説の間の  
埋め草としたいと存じます。

中屋健弑先生 昭和30年前後働き盛りでいらしたと思います。田舎の高校から  
ぽっと出の私には目のくらむ存在でした。威勢がよかったですね、そしてわだかま  
りなく私たち6名に接してくださいました。  
懐かしく「ナカヤさん」とお呼びしたい。

私にとってのナカヤさんは次の2点です。

①「事実を正確につかめ そのうえで発言しろ」これが口癖でした。

冷戦時代の一方の旗頭アメリカには当然批判的な発言も多々ありました。

ただそれが正確で深い知識に基づかず印象批評に終わる場合も多く、

アメリカをよく知るナカヤさんにとっていただつこともあったはずですが。

「まず事実を正確につかめ そのうえでものを言え」 一番 私の胸に響いた  
言葉です。

②現実の社会への積極的な発言

通信社育ちですから研究室にちんと収まる方ではありませんでした。

現実社会への関心発言も積極的になさいました。

例えばNHKラジオで「三人寄れば」というタイトルだったか、いわば

「世相を斬る」鼎談の常連でした。

相方は扇谷正造さん（週刊朝日の名物編集長。夜中アイディアが浮かぶと

すぐに枕元の用紙にメモしたという）花森安治さん（「暮らしの手帖」の創刊  
者・編集長。広告の頁が一切ない、ひも付きでない批判者としてその厳しい  
商品テストはメーカーを震え上がらせた）

私は中学生のとき肺結核にかかり、その間ラジオにしがみついで、就職は  
初めから放送局志望でしたので、この自由奔放な番組はとても魅力的でし  
た。

そして私

志望通りNHKに入局、まずは東北勤務でした。

このとき、「旅」という雑誌のこれも名物編集長戸塚文子さんの委嘱でナカヤさんが取材にいらっしゃいました。私が休暇を取って多少のお手伝いをしたとき、まだ乳児の私の娘を抱っこしてくださったこと、非常に個人的なことですが私にとって我が家にとって、とても忘れられない喜びでした。

放送局でおよそ30年、いちばん思い出すのは美術番組です。棟方志功さん、中川一政さん、高山辰雄さんなどアトリエにカメラを持ち込んで創作の生の姿を中継するという実験でした。

みなさん初めはカメラを意識してぎごちないのですが、こちらが黙ってカメラを回していると例外なく創作に没入なさいます。（近眼の棟方さんは、ちっちゃなマイクをハエと間違っつまもうとなさいました。）そのもっとも昂揚した30分を切り取ってなんの構成もせずそのまま放送しました。これは放送文化基金賞という賞につながりました。

その後番組制作会社を立ち上げておよそ20年。国内海外なんでも手がけるわけですが、心をいやす療法の中の「植物療法」番組でアメリカはシカゴの刑務所に入り込み、若い受刑者が花を育てる風景を撮影したりもしました。

#### そして老境の今

足を痛めて会社からは手を引き遠出はせず、地域（埼玉・所沢のさらに奥）の福祉ボランティアだけ。60名の会員とともに、昼食宅配、家事援助、毎月1回の食事会・勉強会などで程よく楽しく活動しています。

が、この夏はちょっと事情が変わりました。安保法案がどうもあやしいぞと読書会（藤沢周平作品を読む会）の仲間と国会議事堂に3回 代々木公園に1回出かけてしまいました。駅の階段が苦手で、エレベーターを探し探しの「上京」でした。

私はおまけにもう1回。古巣のNHKを取り巻きました。会長さんが「政府が右というのをこちらが左とは言えない」とおっしゃったのに抗議の集会でした。

たくさんの中の一人としてまことに微力ですが、ごまめの歯ぎしりも数万数十万ともなればけっこう大きな音になるかなと、これからも折に触れて「上京」するつもりでいます